

『バッハオーフェン墓参記』の刊行によせて

中山そみ

わたしたちにとつての家族史の研究は、布村一夫先生の講義にはじまっている。もう二〇年ぐらゐも前のこと、職場での女のよわさや、共ばたらきのくるしみを背おっている女たちは、まず、家族や家庭を歴史のなかで正しく把握することから学びはじめた。だが、それまでの教職員組合の学習会では、井上清『日本女性史』やマカレンコの『愛と規律の家庭教育』など、ただ読むだけであった。

そのとき、すでにモルガン研究者として著名であった先生は、わたしたちのねがいに応じて、四〇年もよみつづけているエンゲルス『家族の起原』を手にして、姿をみせられたのである。幸運であった。

それから一〇数年を経ている。老境にあつてますますさかんな先生は、わたしのようなおさない牛歩の研究者をも、つねに、自らの論文もて学びとれよのご指導であつたようにおもわれる。

『母権論』著者バッハオーフェン百年忌を記念した著書『原始・母性は月であった』（『女性史双書』第Ⅰ）にしても、ブレ百年忌としてのいち早い出版であつた。そして、こゝし百年忌記念に、『バッハオーフェン墓参記』を「女性史双書」の第Ⅱとし

て、家族史研究会員の緒方和子・瀬上拡子・光永洋子、それに私を共編者として刊行できたのである。

わたしたちのバッハオーフェン像を、より豊かに深くみちびかれたマックス・ブルクハルト博士（『墓参記』二七頁参照）におおいできたのは、バーゼル大学図書館のロビーであつた。博士は、母校のバーゼル大学図書館手蹟部長であつたころ、『バッハオーフェン全集』一〇巻本の第一巻（一九四三年）の編集者の一人であつたが、バーゼルでのわたしたちを、「バッハオーフェンの友だちにあつたようだ」ともいひ、「母性」や「オジ権」を発見した「バッハオーフェンにどうしてたどりつたのか」ともいひながら、驚異の眼をむけられた。わたしたちは、それはそのまま布村先生への讃辞としてうけとめた。来る九月二五日から二月末まで、バーゼル市の歴史博物館（『墓参記』二三頁）で開かれるバッハオーフェン百年忌記念展覧会には、先生の『原始・母性は月であった』や、モルガン・バッハオーフェン往復書簡の邦訳がおさめられている『モルガン古代社会資料』（七七年）、江守五夫先生の『母権と父権』（七三年）それに私たちの「女性史研究」第三集、第六集、第九集など、バッハオーフェン関係論文をおさめた本とともにこの『墓参記』が展示されることになっている。これらは、私たちの家族史研究会のながいあいだの研究の一端であることはいふまでもない。ささやかな国際交流である。

これまで、私たちがめざしてきたものは「母性」であつた。たとえば、バッハオーフェンの「ヘテリスムス↓母系出自・母系相統（Ⅱ母権）↓ギュナイコクラティである」と解したときのギュ

ナイコクラテイには、排他的婚姻はしめされていない」とし、エンゲルスの「プロミスキテイト↓集団婚↓母系出自・母系相統(≡母権)」とみるときには排他的婚姻ではない集団婚のもとでの母権である」などとされるが、このように母権(≡母性)のとりえ方を、論文集『原始共同体研究』やその他の諸論文が明示している。バツハオーフェンの「母権」や「オジ権」(『墓参記』三八頁参照)を直接に検討することは当然の課題になるのである。それというのも、バツハオーフェンがギリシア神話のなかに「母性」をみいだしたように、また『古代書簡』のなかで「オジ権」を母性の残存としたように、さらに彼に彼にみちびかれて、エンゲルスが古ゲルマン人にそれを見出したように、日本の原始にそれをもとめたためでもある。

日本の原始に「母権」が存在したことはまだ実証されていないにしても、存在していなかったという証明もない。記紀史観によつて、七世紀以前の日本の歴史がゆがめられてしまったというのであれば、バツハオーフェン↓モルガン↑エンゲルスに学ぶという一元的歴史認識のもとに、日本民族の歴史も比較家族的に研究したのである。

バツハオーフェンやモルガンの民族学の成果に学び、原始母性を知れば知るほどに、近代における疎外が体感としてせまってくる。

「継統は力なり」をささえとして、わたしたちの「女性史研究」はことし一二月に、第二二集「バツハオーフェン百年忌記念」の特集号を予定している。ちなみに「社会思想史の窓」誌は、第三

九号を「バツハオーフェン百年忌特集」として、この八月に刊行される。

一人の会員としてのわたしは、あえて「女性史研究」のうめくさを自認しつつ、いつの日にか、「共同体的人間関係としての母性」の疎外をあきらかにして、原始母性を未来に復活させるためのわたしなりの夢を描いてみたいとねがっている。(一九八七年六月三〇日)

(家族史研究会・女性史)

追記

「社会思想史の窓」第〇〇号は「バツハオーフェン一〇〇年忌記念特集号」として八月二〇日に発行されました。次のものがのせられています。

- (1) 布村一夫「ロマン主義者バツハオーフェンとプリフォー」(2) 石原通子「バツハオーフェンとプリフォー」(3) 緒方和子「バツハオーフェンの遺稿に接して」(4) 中山そみ「バツハオーフェン『母権論』を学ぶ」(5) 光永洋子「日本における『母権論』のうけ入れ」(6) 『窓』編集部「バーゼル歴史博物館主催によるバツハオーフェン一〇〇年忌記念行事について」。
- 編集部・埼玉県浦和市本太二一七七八、石塚方。